群青 ―We keep on challenging― Vol.16　　Dec14th2021

交流文化祭、実施できてよかった･･･。

12 月 10 日（金）交流文化祭は、コロナ禍にもかかわらず、無事実施できて安堵した。10 月の当初計画からは時期をずらしてみたものの、感染状況がどのように変化しているかを予め読み取るのは難しく、また 12 月実施ということで寒さも心配ではあった。ところがそれも杞憂に終わった。

県下では新規感染者が一桁となり、晴天のもと風も少なく、外での模擬店の行列時にも身体が凍えることはなかった。何より、生徒の皆さんが守るべきところをしっかりと守ってくれたおかげで、混乱もなく、一日中キラキラした笑顔が満ち溢れていた。青春していた。こちらが大きな声で注意する必要もないほど、生徒の皆さんは落ち着いて楽しんでくれていた。スマホの時間外使用も見なかった。

「制約があるから、工夫する。工夫するから、成長する。」ということを生徒の皆さんも先生方も体現してくれたのではないか。そして、13 日（月）には、切り替えて落ち着いて授業に取り組んでくれている。欠席も少ない。閉会式の際、教頭先生がおっしゃった「ハレ」と「ケ」のけじめをしっかりとつけられることも社会人としては大切な考え方だ。一つひとつできるようになっていることが成長の証だ。

3 年生の文化部員は、引退の時期がかなりずれ込み、落ち着かない心情もあっただろう。また、他の 3 年生も文化祭の準備に忙しい日々を過ごしただろう。この文化祭という高校生活の確かな経験を胸に、これでしっかり切り替えて、それぞれの進路に向けてラストスパートをかけてくれることを期待している。

企画運営の生徒会、生徒指導部の先生方をはじめ、関わってくれた全ての方々に感謝したい。

リアルな体験には、他の何物にも代えがたい本物の力があると感じさせてくれた文化祭であった。

泣くことにはストレスを発散する力がある

「君の膵臓（すいぞう）を食べたい」このドキッとするタイトルの本を知っているか。2016 年に本屋大賞を受賞し、2017 年に実写映画化、2018 年にアニメ映画化された住野よるさんの小説だ。心を閉ざし、一人で生きてきた志賀春樹という高校生が、膵臓の病気で余命が幾許もない奔放な同じクラスの山内桜良との関係の中で成長するという青春小説。お互いが自分にないものを持っていることに憧れ、ひかれあっていく二人。いつか死ぬとはわかっていたものの、別れは突然訪れる。桜良の言葉を二つ紹介する。

「違うよ。偶然じゃない。私たちは、皆、自分で選んでここに来たの。君と私がクラスが一緒だったのも、あの日病院にいたのも、偶然じゃない。運命なんかでもない。君が今までしてきた選択と、私が今までしてきた選択が、私たちを会わせたの。私達は、自分の意思で出会ったんだよ。」

「生きるってのはね、きっと誰かと心を通わせること。そのものを指して、生きるって呼ぶんだよ。誰かを認める、誰かを好きになる、誰かを嫌いになる、誰かと一緒にいて楽しい、誰かと一緒にいたら鬱陶しい、誰かと手を繋ぐ、誰かとハグをする、誰かとすれ違う。それが生きる。自分一人じゃ、自分がいるって分からない。誰かを好きなのに誰かを嫌いな私、誰かと一緒にいて楽しいのに誰かと一緒にいて鬱陶しいと思う私、そういう人と私の関係が、他の人じゃない、私が生きてるってことだと思う。私の心があるのは、皆がいるから、私の体があるのは、皆が触ってくれるから。そうして形成された私は、今、生きてる。まだここに生きてる。だから人の生きてることには意味があるんだよ。自分で選んで、君も私も、今ここで生きてるみたいに」

不覚にも図書館で号泣してしまった。この時ばかりはマスクに感謝した。読んでみ･･･。

We keep on challenging. 挨拶日本一の高校を目指して　文責：姫路別所高等学校長　篠原　歩